

「こころ」再読書メモ

「こころ」を初めて読んだのは、10代の中頃だった。

それ以前にはほとんど本を読んだことがなかったので、振り返ってみれば、はじめての長編小説だった。

今でもはっきり覚えていることは、

読み始めて、何度挫折したか、そして再挑戦、いつ読み終えたかの記憶は定かでない。でも読み通せた。

あの時の手ごたえは、私の読書における根本経験だったのかもしれない。

そこにあったのは、今までに経験のない分量を読み終えたと言う充実感と、把握できていない意味の荒野を前に茫然とするしかなかった、ある種の敗北感だったのかも。

広大な 円 を前に、自分が理解し、認識し得たのはわずかな 弧 に過ぎないことが痛いほどはっきりしたのである。

もう一つ、このときの読書によって芽生えたのは、イメージによって「読む」と言うコトバへの接近法だった。

もちろん、当時は言語である「言葉」と非言語的な意味の表れとしての「コトバ」の差異など知りようはずもない。

だが、書物とは、言語によって言語では表現できないものを 読み手の心に届けようとする営みであることは、おぼろげながらも理解できた。

「先生」と「私」が出会う場面、「先生」の郷里の風景、「私」の実家の部屋、「K」の部屋にある書棚、「K」がなくなった後の部屋、そして遺書を書く「先生」の後ろ姿など。

今回も、学生の時に遭遇した意味の光景が、あながち誤ったものばかりではないことを、たしかめることになった。

何度読んでも「読み終わらない」本がある。

ことに古典と呼ばれる書物の場合、物理的な意味で、「読み終えて」も、終わったと言う実感がわかないことが少なくない。

「こころ」もそうだった。

だが、知命を過ぎ、こうして1冊の著書を読み終えることによって、ようやく「こころ」は、再読し得る本になった。

再読するためには、1度は読み上げなくてはならない。

長年を費やして、この小説をやっと一度、読み終えたような気がしている。

そしてその後の挑戦には、ゆとりができ、読書期間も縮小、そして、2度の「全集」読みも達成した。

大正3年（1914年）4月から8月 朝日新聞 110回連載

9月には半自主出版の形で刊行されたが、漱石が序文を書き、表紙のデザインも自分でしている。

単行本化に際し、連載時の全110章を上・中・下に3分割し、それぞれ「先生と私」「両親と私」「先生と遺書」に再構成した。

上・中の語り手が青年の「私」。

語り手の「私」は地方出身の青年で、明治が終わる少し前に大学を卒業。高等学校時代に鎌倉の海水浴場で一人の紳士と知り合い、それ以後「先生」と呼んで私淑している。

先生は定職を持たず、勇んで生活しているようだ。「私」は先生の家を訪問するようになるが、先生の内面と過去は謎に満ちている。

下は「先生」が自らを語り、かつて友人から恋人を奪ったこと、そしてその罪悪感に長く苛まれていることが明らかにされる。

明治の「青年期」を終えた日本人の、倫理感とエゴを鋭く追及した内容であり、漱石文学の到達点といわれる傑作である。

漱石が年来抱いていた「自分が自分でありながら、自分の主人公ではない」という不安が、この作品での主題である。自分本位を保とうとしても、いざというときに自分が自分でないものによって圧倒されてしまい、一層苦しいところに追い込まれてしまう。

「先生」は「多くの善人がいざという場合に、突然に悪人となるのだから油断ならない」と言っているが、信頼している叔父に遺産の問題で裏切られる。

自分だけは大丈夫と思っていたが、恋愛の問題では嫉妬と我に支配されてしまう自分を知る。

他人を呪い嫌っていた自分が、今度は自分自身を呪い嫌うことになってしまう。

その苦しみに悩みぬいた末、今度は自分自身の犠牲者として殉じてしまう。

愛と不信とを同時にもつという矛盾に苦しむ知識人の姿を的確にとらえているこの作品は、若い読者に深い感銘を与え続けている。

こころを読みなおす 一病と人間― 小森陽一 著、講演から

夏目漱石の人生も、伝染病と対峙する近代医療の問題と密接に結びついている。

夏目漱石という作家の感染症とのかかわりで大事な問題は「心」という小説にしっかり書き込まれている。

短編を積み重ねる 先生と遺書を

上、先生と私

中、両親と私

下、先生の遺書

第1回目 海水浴場と雑司ヶ谷霊園

(先生と私)

・夏休みを鎌倉で過ごす→友達からの誘い、しかし友人は母の病気を理由に実家に帰る

海水浴場の概念→英国から入ってきた翻訳語。

・海水浴場→英国シーバースィング→医療効果、徴兵制と結びつく兵士訓練（スイム）←西南戦争、コレラ菌、オランダ疫病対策、脚気 → 関西から大森、鎌倉海水浴場へ → 近代化と医療対応、→ のちに学校における軍事教練へ

・先生との出会い→海水浴の西洋人と先生 → 先生と私 東京に戻って、→ 雑司ヶ谷墓地での出会い

・墓地通いの分けへ。

第2回目 明治天皇の病気

先生の意識変化、告白

両親の死 → 腸チフス、父看護が、母に感染する

先生における「病と人間」

父親の病 腎臓の病 先生の奥さんの親も同様

病と不自然な暴力の死

卒業論文を書上げ、→ 6月卒業、→ 散歩 → 親の財産の処分と忠告

親戚に欺かれる、→ 屈辱と損害、→ 人間を抜くむ様になった

先生の過去を尋ねる

秘密を話しましょう！。

先生は、人を信用して死にたい。

適当な時期に

(両親と私)

私(青年)は、故郷に帰る

奥さん静と先生の会話、死に対する悲哀などから、

尿毒症(糖尿病→腎臓病の症状の変化)の心配

故郷での卒業祝い

明治天皇の病気の報知、と父親の病気

糖尿病→腎臓病→尿毒症の症状へ変化

明治天皇崩御、10日後乃木希典の殉死 9月13日

そして父親の卒倒、危篤へ

先生からの電報 9月14日

「合いたい、来られるか？」 に対し、「いけない」、

では委細手紙で知らせる。

再、電報 9月16,7日ごろ、「来るに及ばない」

そして、先生は長い手紙にしたため → =遺書を作成 → 投函

(先生と遺書)

父親の危篤を差し置いて上京へ

下の 56 章 死の決断

乃木希典の死から 2~3 日後 9月15日~17日決心

第3回 先生の両親と腸チフス

日本のコロナ対策は？

先生の生きた時代、戦争と感染症の時代だった。

両親の死

父親の看護、

母の遺言の 「東京へ」、とは？

親戚の対応 → 叔父にごまかされた財産管理

学生が東京へ出るということは、

中学→東京へ出る→高等学校へ入る→帝国大学に進む

(文化大学、理科大学、法科大学、医科大学)

大學へ進級を契機に、帰省して 友人に頼み、財産の始末をする

実家に叔父夫婦居住 → 娘との縁談話など

財産の措置 (叔父にごまかされた) 、 → 疑い、処分 (現金化) → 心持の変化

友人に頼み、財産の売却 → 長子相続（金銭化） → 預金・公債を元に、利子生活者へ → 勉学者として生きる（利子の半分で暮らせた） → 小石川へ下宿探しへ（軍人の家族を紹介される） → 軍人家族の素人下宿に入居

（明治民法施行前（31年前）仏→独式へ）

砲兵工廠（武器工場）、伝通院 → 大學に通う

心の時代背景

日清戦争（94-95） → 多額の賠償金 → 日露戦争（04-05） → 三国干涉 臥薪嘗胆

（朝鮮支配）

（南下政策）

（軍需産業）

旧民法による帝国主義的資本主義体制へ突き進む

遺産相続による財産取得

相続トラブルから → 現金化 → 利子生活者へ

伝通院、小石川下宿（軍人家族、厩のある市ヶ谷→小石川の小さな家へ

奥さん（軍人未亡人→軍人恩給）、お嬢さん（娘）、下女（手伝い）

私（学生）、そして、K（幼な友人）が加わる。

第4回目 「精神的向上という病」

鷹揚な対応 下14章 → ダブルバインド 15章～18章 どちらかに決めたい

引き裂かれた思い 女を見くびる、→ 愛へ（肉から愛へ） → 宗教心に近い

先生の愛をめぐる意味 恋は罪悪ですよ ←（恋愛をすると、自身の普段の性格が変わってしまうから、以下、本文から、、）

→ ・Kとの友情も恋愛によって裏切ったから、（友情＞恋愛）

・恋というのは卑劣な「遅れ」を生むものだから（Kに先に告白されたことから、対応が後手、後手になったこと、→ Kを自殺に追い込んだ）

・Kに対する劣等感が罪の意識を増幅させたから（生活力＜頭の良さ）

・心 → 恋愛と愛情、女

→ 感染症（ペスト）→、近代化と感染症対策

漱石自身、幼いころ種痘にり患、あばた顔、トラウマ、伝染病に対する差別

心のキーワード → 恋愛現象におけば

恋 → 関係を恋する、憧れる

愛 → 関係を愛でる、寿ぐ、親しみ

LOVE → 翻訳語 近代の恋愛観 ← 恋は、恋する憧れ

愛は、キリスト教等、宗教的

本文から

→Kとのトラブル（19章～23章 Kを下宿へ住まわす、25章奥さん、お嬢さんに協力請う） → 30章（82） 房総旅行、向上心のない奴は馬鹿だ（Kの言）
→ 32章Kの告白、36章Kの自白（お嬢さんへの思い） 41章策する（向上心のない奴は馬鹿だ→Kの言を繰り返す） → Kの自殺、真相究明（理想と現実の彷徨） → 雑司ヶ谷墓地へ埋葬

その後、先生は

→ 心の変化 → 不安 → 学問 → (生活の余裕等) → 心のたるみ、→ 明治天皇の崩御 → 乃木大将の殉死 明治の終わり → 先生の自殺決心 → 遺書作成 → 私へ宛て投函 → 病気の父を置いて上京 → 車中にて遺書を読み返す

まとめ(類推)

心という小説を、「先生」の両親が、相次いで感染症としての「腸チフス」で死んだことからの、因果関係の連鎖で読みなおしてみると、

そこからは、日清戦争が大日本帝国をどのように変質させたかという一連の問題系が浮かび上がってくる。

とりわけ日清戦争後の 1898 (明治 31 年) までの民法論争で制定がもつれ込んだ、明治民法が「心」における一連の事件を規定していたことがわかります。

-鎌倉湾 安全→太平洋、引き潮満ち潮、怒涛 → 明治天皇の葬儀、秋台風、轢死者多数でた。、

未亡人に対する差別、そして時代、疫病への反抗の気持ち、→ 明治という時代への反抗でしょうか。

経過をドキュメントしてみた。

「こころ」時空の経過			
時代	小石川 お嬢さん宅	先生	私、熊本、両親
		父母、腸チフスに感染、死亡 財産を親戚叔父に託す	
明治27～28	日清戦争 軍人未亡人、小石化へ移転 軍人恩給+素人下宿 奥さん・お嬢さん17歳・下女	94年、新潟から上京、高等学校、 17歳 親戚・叔父の裏切り 相続財産を金銭化、利子生活者になる 帝大生、23歳、新しい下宿先を探す ←小石川の素人下宿に入居	
明治30年 明治31年		そこから大學に通う 幼馴染みの K を下宿に誘う 愛をめぐる問題 こころ、向上への道 Kの告白と嫉妬、 向上心のない奴は馬鹿だ K の自殺 →雑司ヶ谷墓地埋葬	
	お嬢さんと結婚 義母の死		
明治37～38 日露戦争			高等学校入学のため上京、17歳 最初の夏休み、友達と鎌倉で過ごす 先生との鎌倉の海水浴場での出会い 先生宅に出入りし、奥さんとも親しくなる 雑司ヶ谷墓地の散歩 先生への自淑
明治45年	7月明治天皇の崩御 9月13日 乃木希典自刃	2～3日後、自殺を決心	明治45年6月、大学卒業 23歳 7月 帰京 父の看護
	～10日ぐらい	「遺書」の作成	先生からの電報 9月14日 16～17日、来るに及ばず
		9月17～18 投函	
		先生の自殺 1912年 35歳	先生からの遺書を受け取る
			上京、車中で既読
大正3年	1914年 大正3年 漱石「こころ」出版		～ ～ ～
			???
			35歳ごろ、「先生と私」 「両親と私」 「先生の遺書」公表？

小説作品は、シーケンシャルに描かれているが、

時間、空間的な入り練りがある

言ってみれば、「先生の遺書」を主体としたものではなく、語り手の私が、ドキュメントの結末として、先生の遺言に従って、第三者に公表したものと読める。

したがって、

私と先生の奥さんとの関係、

さらに、先に静さんが逝っていること

あるいは、遺言を無視して、公開したか、

いろいろと、想像力をたくましくさせる読後感である。

疫病、感染症を契機とした時代の流れ、風俗を背景に、明治に生きた「青年の心の動揺」を作者は描いたのではないか。

そして、青年ばかりではなく、同時代の若い女性の生きざまを描いた樋口一葉の「にぎりえ」を往時の風俗の一端として読んでみた。

心のお嬢さん静の生き方や、にぎりえのお力等の生きざま、

確たるイメージとして、明治時代のリアリテイが描かれたのではないのでしょうか。